

Ⅱ 中央診療局の現況と研究研修事項

〔中央診療局の現況〕

中央診療局長は西田 勉医師、中央診療局次長は横江 勝医師が務めている。中央診療局は、放射線部、臨床検査部、手術部、リハビリテーション部、集中治療部、人工透析部、内視鏡部、臨床工学部、栄養管理部の9部門から構成されている。各部門は医療専門職として活動し、質の高い医療技術を提供している。各部門とも、地域医療圏のそれぞれの専門職種における中心的・指導的役割を担っている。また、近年、組織横断的なチーム医療の重要性が強調されており、中央診療局の各部門も院内外の幅広い職種と連携し、チーム医療を推し進めている。中央診療局各部署は、院内の数多くの委員会のメンバーとして活動しているとともに、委員会の下部組織である医療チームの一員として、早期離床リハビリテーションチーム、感染対策チーム、医療安全管理者担当者会議、栄養サポートチーム、嚥下訓練チーム、医学雑誌編集委員会、総合通信システム定例会議、透析器機安全管理委員会などに参画している。

以下に、各9部門の「現況」、「課題」および「研究研修事項」等について記載する。

1. 放射線部

<現 況>

令和5年度は、診療放射線技師24名(正職員23名、臨時職員1名)で業務を行った。放射線部では一般・歯科・乳房撮影、救急室・病棟でのポータブル撮影、手術室撮影、CT、MRI、血管造影検査、TV透視検査、骨塩定量検査、RI、放射線治療の業務を行っている。

市民の期待に応えられるよう、業務改善し効率の良い検査体制を整えることに加え、放射線医療機器の更新も行っている。令和5年度はMRI装置更新と循環器用血管撮影装置の更新を行った。MRI装置については3テスラを導入、循環器用血管撮影装置については地域の急性期医療を担う病院としてニーズに沿えるよう汎用タイプの装置を導入した。

医療放射線の安全管理体制の確立については、線量管理システムによって記録された対象放射線医療機器の線量データを元にガイドラインとなるDRLs(診断参考レベル)との比較を行い、院内に設置された医療放射線管理委員会において、適切なプロトコル設定により安全で有効な放射線診療が行われていることが令和5年度も確認されている。

課題であった診療放射線技師免許のアップデートに関しては全員修了することができた。

【一般・歯科・乳房撮影】

一般撮影は57,545件、歯科撮影は3,618件、乳房撮影は1,273件で若干変動はあるがほぼ平年並み。

【救急室・病棟でのポータブル撮影】

ポータブル撮影は9,309件で少し減少。

【手術室撮影】

手術室撮影件数は3,058件でほぼ平年並み。

【CT】

CT検査は31,940件で少し増加。

【MRI】

MRI検査は5,687件で平年に比べ減少したが装置更新工事が影響したと考えられる。

【血管造影検査】

血管撮影検査は1,685件で年々増加。

【TV透視検査】

TV透視検査は1,034件でほぼ平年並み。

【骨塩定量検査】

骨塩定量検査は504件でほぼ平年並み。

【RI】

RI検査は663件で減少。骨シンチが減少、それ以外はほぼ平年並み。

【放射線治療】

放射線治療は4,815件でほぼ平年並み。

<今後の課題>

1. 移動型X線撮影装置更新作業

地域の中核病院として設備の充実を図る事は重要で、大規模な災害や停電時にも撮影が可能な装置の導入に取り組むこと。

2. 頭部・腹部用血管撮影装置更新作業

急性期医療の中心となる病院として適切な装置更新に向け、情報収集を行い計画的に進めること。

3. 職員のレベル向上の継続

高性能な装置が増える中、十分な習熟、知識の習得を行い診療に価値のある画像提供ができるように部門全体で継続して取り組むこと。

<研究研修事項>

学術・研修活動（市立豊中病院主催・共催・その他）

◎市立豊中病院主催・共催

■第54回市立豊中病院二次救命処置講習会（Immediate Cardiac Life Support）◎

インストラクター（ブースリーダー）

河合政和

豊中市、市立豊中病院

約30名

令和6年1月21日

■第60回箕面市立病院二次救命処置講習会（Immediate Cardiac Life Support）

インストラクター

河合政和

箕面市、箕面市立病院

約30名

令和5年4月30日

■清恵会第二医療専門学院 診療画像検査技術学Ⅳ

清恵会第二医療専門学院専門課程・放射線技術科 非常勤講師

河合政和

堺市、社会医療法人 清恵会

清恵会第二医療専門学院

約30名

令和5年12月2日－令和6年1月27日

研究会・集談会発表

■スマスピって実際どうなん SmartSpeed使用経験

宮野英人

第5回 関西Gyro Meeting

大阪市 旭区民センター

令和6年1月13日

2. 臨床検査部

<現 況>

臨床検査部の構成は、第一統括部門（検体検査：生化学・免疫・一般・血液・輸血・外注・受付・外来採血・システム）と、第二統括部門（生理機能・微生物・病理）で構成されており、従事している職員は臨床検査技師41名（常勤26名、非常勤15名）、管理医師1名（非常勤）の合計42名であった。令和2年度の検体検査装置の一括更新後、外来及び入院の検体検査は、概ね60分以内の報告ができる体制を維持し、外来採血も8時30分開始後、平均待ち時間は10分以内を維持していたが、非常勤職員の人員確保に難渋し、常時3～5名の人員不足で業務を行っていたため、検査結果の遅延や採血待ち時間の延長が見られた。

各検査件数は、概ね新型コロナウイルス感染症の流行前のレベルに回復した。新型コロナウイルス感染症の類型変更後も、継続的に検体採取やPCR検査、コロナ抗原検査を行った。

今年度は、チーム医療としてICTやNST、糖尿病教室、乳腺検討会などへ参加し、臨床検査技師として院内に情報を提供し、また知識の向上に励んでいる一方、令和5年度はISO15189 認定取得のため審査を受審した。

また臨床検査部に設置されている超音波機器管理センターでは、超音波検査機器の効率の良い運用や適切な更新計画を策定して一元管理を継続し、今年度も予算申請を一括で行った。

<今後の課題>

1. 人員確保

不足している非常勤職員の採用

2. 病棟検査技師の業務

令和6年度より、病棟での検査業務を行う臨床検査技師の育成

3. 内視鏡技師の育成

令和6年度より、内視鏡室での臨床検査技師の業務開始

内視鏡技師の育成

4. ISO15189の2022年度版拡大審査の受審

ISO15189 2012年度版の取得後、2022年度版への拡大審査を受審

<研究研修事項>

学会発表

■CNS-DSC連携を用いた心電図モニタリングシステム波形によるホルター解析の有用性について

山内一浩、齊藤直輝、橋詰久美子、福島景子、加藤京子

第72回日本医学検査学会 in GUNMA

群馬県 高崎市、Gメッセ群馬・高崎芸術劇場

令和5年5月20日－21日

■迅速検査における圧挫細胞診が診断の一助となった黄色腫性下垂体炎の1例

大仲知子、奥田陽造、佐脇千紗、宮坂裕子、寺元加奈、田村裕美

第64回日本臨床細胞学会総会(春期大会)

愛知県 名古屋市、名古屋国際会議場

令和5年6月10日－11日

■軽症～中等症対応病院において栄養障害と糖尿病はCOVID-19重症化にどう影響するか

齊藤直輝、岡内幸義、金谷愛子、井上文子、岩澤 卓

第39回日本臨床栄養代謝学会学術集会

神奈川県 横浜市、パシフィコ横浜

令和6年2月15日－16日

研究会・集談会発表

■当院の現状と 今後の活用方法について

山内一浩

第3回採血業務指標化システム導入ユーザー会

Web開催

令和5年6月9日

■モニター心電図波形をもちいた長時間心電図解析の運用検討

山内一浩

日本光電 生理検査部門システムフォーラム～データ保存先 システム活用への展望～

Web開催

令和6年2月13日～3月29日

講習・講演

■健康寿命を延ばすには

松山辰男

朝日カルチャーセンター連携シンポジウム

「100歳まで元気で暮らすための糖尿病と変形性関節症対策」

大阪市、ハイブリッド開催（朝日カルチャーセンター中之島教室）

令和5年4月13日

■グルカゴン発見100周年ーまだまだ多い謎

松山辰男

北関東甲信越グルカゴンカンファレンス～グルカゴン発見100周年記念～

東京都 中央区、ハイブリッド開催（ベルサール東京日本橋）

令和5年6月17日

■心電図に関するシリーズ講習会 4回目 上室頻拍編

齊藤直輝

大阪府臨床検査技師会

大阪市、大阪公立大学医学部附属病院

令和5年9月21日

■継承する心電図判読のコツ リズム異常編

齊藤直輝

日臨技近畿支部医学検査学会（第62回）

和歌山県 和歌山市、ホテルアバローム紀の国

令和5年10月21日

■IP、K、Mgが低下 それってRefeeding症候群かも

下脇千恵子

大阪府臨床検査技師会／2023年度NST褥瘡部会講演会

大阪市、大阪医療技術学園専門学校

令和5年11月25日

■検査スキルを磨いて信頼を得る

齊藤直輝

第7回大臨技医学検査学会

大阪市、オービックホール

令和6年2月11日

司会・座長・その他

■座長：山内一浩

胎児心エコー・重点スクリーニングの有効性 他5演題

演者：戸田中央産院 圓田則子 他

第30回日本胎児心臓病学会学術集会

東京等 千代田区、一橋講堂

令和6年2月17日～18日

3. 手術部

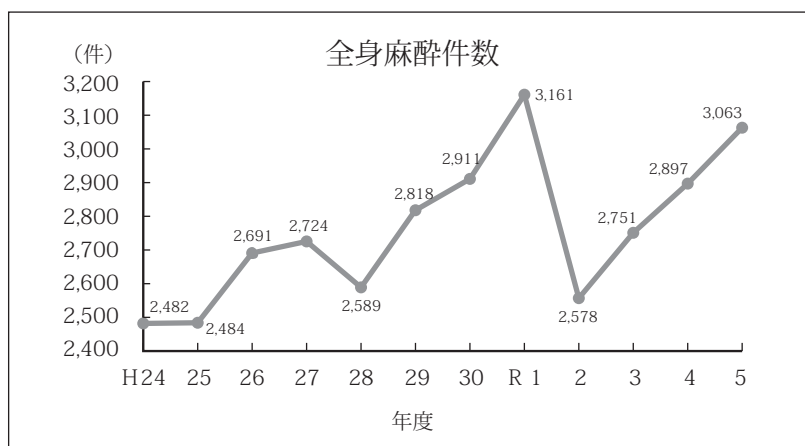
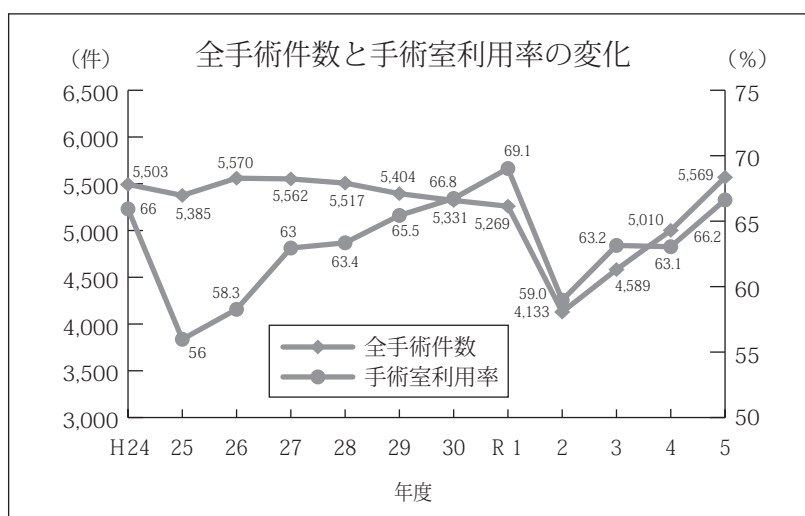
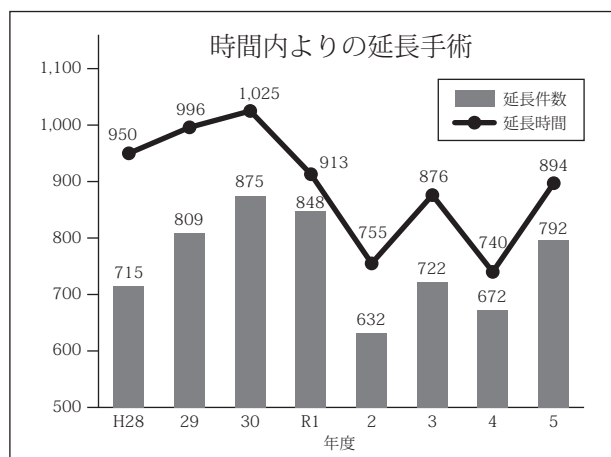
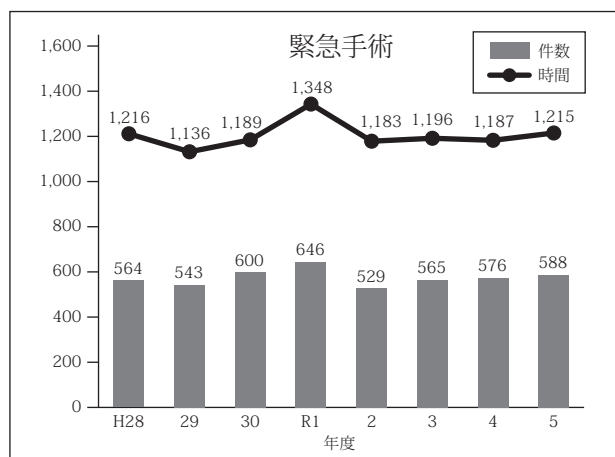
<現 況>

COVID-19感染症の流行により当院でも中等症・重症患者の受入れた。しかし、COVID-19感染症の影響は前年度ほど甚大ではなく、令和5年度の手術室稼働率は66.2%と前年度63.1%より2.9%増加、全手術件数は5,569件と前年度よりは559件(11%)増加した。また、麻酔科管理症例は3,079件であり、その内3,063件が全身麻酔(175件に硬膜外麻酔を併用)であり前年度から166件(5.7%)増加した。緊急手術と時間内からの延長手術の件数と時間の経年変化を示す。緊急手術は件数・時間共にほぼ同程度である。時間内からの延長手術は令和4年度は減少したが、令和5年度は再び増加し令和3年度と同等となった。各診療科の症例数を示す。また以下に全手術件数・手術室利用率と全身麻酔件数の経年変化を示す。全身麻酔件数は平成28年度は麻酔科医減少の影響により減少した。しかし平成29年度から再び増加し、令和元年度には過去最高の症例数となった。令和2年度は新型コロナウイルス感染症の影響により著減したが、令和3年度から増加し令和5年度には令和元年度程度まで回復した。一方、全手術件数は令和元年度まで一貫して減少しており、これは各科管理局所麻酔・脊椎麻酔手術の減少のためと考えられる。さらに令和2年度は新型コロナウイルス感染症の影響により著減したが、令和3年度から増加し令和5年度は過去10年間で最高となった。また、手術室利用率は平成25年度から着実に増加しており令和元年度には過去最高の69.1%となった。令和2年度は新型コロナウイルス感染症の影響により著減し、令和5年度は平成30年度程度で回復している。

各診療科の症例数を示す。

	令和5年度		令和4年度	
	手術件数	全身麻酔	手術件数	全身麻酔
外 科	1,104	1,067	1,208	1,126
整 形 外 科	1,150	631	989	558
脳 神 経 外 科	189	106	179	91
心 臓 血 管 外 科	214	50	225	69
皮 膚 科	370	52	321	53
泌 尿 器 科	552	295	528	294
産 婦 人 科	603	264	605	259
眼 科	428	0	307	0
耳 鼻 い ん こ う 科	482	391	407	300
歯 科	229	131	228	138
形 成 外 科	230	67	0	0
そ の 他	18	9	13	9
合 計	5,569	3,063	5,010	2,897
月 平 均	464	255	418	241

また以下に全手術件数・手術室利用率と全身麻酔件数の経年変化を示す。



<今後の課題>

手術室稼働率は令和元年度に最高となったが、令和2年度は新型コロナウイルス感染症の影響で大きく低下し令和5年度は増加したが新型コロナウイルス感染症流行前には至っていない。より一層の向上をめざすためには、各手術の時間短縮と症例入れ替え間の時間短縮が必要である。

また、麻酔科医の増員だけでなく、手術室看護師の増員が急務かつ必須である。

さらなる業務内容の見直しと効率化を図り、より安全で質の高い手術を提供できるようにしていきたい。

4. リハビリテーション部

<現 況>

急性期病院のリハビリテーションの目的はできるだけ不動の時間を少なくし、離床を行ない早期に退院をめざす事である。令和5年度も、そうすべく介入したところ、前年度を上回る紹介があり処方件数も大幅に増加した。しかしながら、現状の職員数では、満足のできるリハビリテーションができていないのが現状である。診療報酬は、前年度比較では、職員が育児休暇から復帰したことや臨時職員が確保できたことで理学療法士が5%増、作業療法士が49%増、言語聴覚士が2%増、全体で13%増となった。学会発表は5演題を発表した。

診療報酬別実施延べ人数

() 内は前年度値

区分	職種	脳血管疾患	廃用症候群	運動器疾患	呼吸器疾患	心大血管	がんリハ
入院	理学療法士	8,001(9,106)	14,190(11,625)	5,809(5,104)	4(0)	162(1)	1,625(1,575)
	作業療法士	5,887(4,855)	3,359(1,536)	2,039(232)	0(0)	0(0)	85(0)
	言語聴覚士	2,591(3,533)	3,950(3,359)	0(0)	0(0)	0(0)	0(0)
外来	理学療法士	0(0)	0(0)	3,426(1,980)	33(75)	523(597)	0(0)
	作業療法士	0(0)	0(0)	4,938(1,684)	0(0)	0(0)	0(0)
	言語聴覚士	0(0)	0(0)	0(0)	0(0)	0(0)	0(0)

単位(人)

療法士別診療報酬

職種	点数／単位数	令和3年度	令和4年度	令和5年度
理学療法士	点数(点)	9,203,303	10,784,899	11,305,519
	単位数(単位)	37,389	43,731	45,566
作業療法士	点数(点)	3,577,894	2,931,859	4,356,770
	単位数(単位)	14,311	11,950	17,681
言語聴覚士	点数(点)	2,443,310	2,251,413	2,306,916
	単位数(単位)	9,246	8,904	9,203
指導料		208,800	233,100	399,000
全体		15,433,307	16,201,271	18,368,205

単位(点)

<今後の課題>

今年度のリハビリテーション依頼は、各診療科より前年度を上回る紹介があり、処方件数も大幅に増加した。しかしながら、現状の職員数では、満足のできるリハビリテーションが実施できていない。また、休日のリハビリテーション実施も課題であり増員が必須の状況である。増員するだけでは無く、当院としてどのようなリハビリテーションが必要とされているのか、どのようなリハビリテーションを提供していくのか検討が必要である。

<研究研修事項>

学会発表

■右下腿コンパートメント症候群・右腓骨神経麻痺を呈し地域医療機関へ引き継いだ症例を経験して

森田扇太郎

第60回日本リハビリテーション医学会学術集会

福岡県 福岡市、福岡国際会議場

令和5年6月29日－7月2日

■無動無言症状を呈し経口摂取困難であったが氷片を使用した直接訓練を継続し、経口摂取可能となった一症例

深川大樹

第61回日本リハビリテーション医学会学術集会

福岡県 福岡市、福岡国際会議場

令和5年6月29日－7月3日

■当院における胃癌周術期リハビリテーションの取り組み

足立ゆかり

第61回日本癌治療学会学術集会 神奈川県 横浜市、パシフィコ横浜 令和5年10月19日－21日

■COVID-19のリハビリテーション治療 各流行期の特徴と今後の展望

大川知之

第7日本リハビリテーション医学会秋季学術大会

宮崎県 宮崎市、シーガイアコンベンションセンター 令和5年11月3日－5日

■当院のがんリハビリテーション治療の取り組み

春名雅裕、岡田京子

第8日本リハビリテーション医学会秋季学術大会

宮崎県 宮崎市、シーガイアコンベンションセンター 令和5年11月3日－6日

講習・講演

■「無理なく安全に行うための移乗・移動介助法」

大川知之

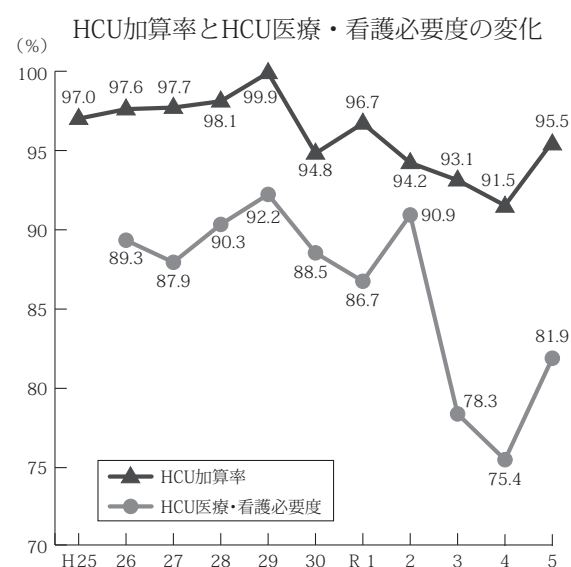
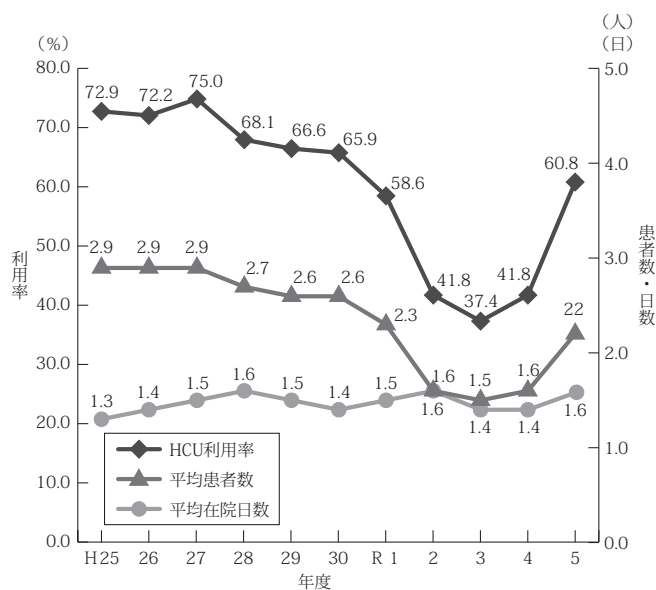
(公益社団法人)大阪府臨床検査技師会 多職種公開講座 第14回北地区地域オープンセミナー

吹田市、JEC日本研修センター江坂 令和5年11月18日

HCU

全科症例			
術後管理	28	慢性呼吸不全急性増悪	4
術後管理（緊急）	19	急性薬物中毒	1
脳出血、硬膜下血腫、脳挫傷	57	腎不全	8
脳梗塞	3	敗血症	12
消化管出血	15	代謝障害（肝不全、重症DM）	22
急性膵炎	9	アナフィラキシー	4
胆嚢炎・胆管炎	11	救急蘇生後	1
急性呼吸不全（肺炎含む）	20	その他	191
合計			405

循環器症例	
狭心症	18
心筋梗塞	9
心不全	76
重篤な不整脈	16
心嚢液貯留	1
大動脈解離	1
その他	20
合計	141



<今後の課題>

ICUは慢性的に満床の状態が続いており、病状の安定した患者の病棟への迅速な帰室が必要である。病棟運営を含めた病院全体での取り組みが必要となる。また看護師の継続的な充足が病床維持には必須である。新型コロナウイルス感染症の流行に対応して集中治療室で新型コロナウイルス感染症重症患者受入れは滞りなく行えている。

さらなる業務内容の見直しと効率化を図り、より安全で質の高い集中治療を提供できるようにしていきたい。

各科症例数（ICU・HCU）

麻酔科管理 ICU・HCU 入室症例数	令和5年度	令和4年度
外科	415	417
整形外科	52	58
脳神経外科	80	59
心臓血管外科	47	68
皮膚科	6	5
泌尿器科	25	22
産婦人科	19	38
耳鼻いんこう科	5	3
歯科	3	3
消化器内科	0	0
内科	42	59
神経内科	3	3
眼科	0	0
小児科	5	0
合計	702	735
月平均	58.5	61.3

6. 人工透析部

<現 況>

今年度も従来どおり日本透析医学会専門医制度認定施設であり（常勤医師のうち2名が日本透析医学会認定専門医資格と指導医の資格を有している）、次年度認定更新見込みである。また、人工透析部長の竹治が腎代替療法専門指導士の資格を取得し、今年度より透析導入期加算2の算定ができるようになった。（当院では腎移植を行っていないため、透析導入期加算3は不可能）

人工透析室の公称病床は7床であるが、令和2年度大阪府からの新型コロナウイルス感染症透析患者受入補助事業にて1床分のベッドと透析コンソールを追加しているので、前年から引き続き実質計8床で運用中である。血液透析を始め各種血液浄化療法を週6日稼働・実施している。人工透析部専任スタッフは配備されていないため、医師は腎臓内科医師が併任し、臨床工学部所属の臨床工学技士4名が交互に透析業務に携わり、看護師はICU所属の看護師が透析患者数に応じて派遣され対応している。人工透析室では、血液透析以外にも血液濾過、血漿交換、血液吸着、白血球除去療法(LCAP)、腹水濃縮再静注法(CART)なども施行している。血液透析に関しては、地域の医療機関との役割分担及び限られた病床の有効活用のため、外来通院維持透析は行っておらず、主に急性腎不全の血液浄化、慢性腎不全の維持透析導入期、そして他院で維持透析中に生じた疾患の検査・治療入院中の透析を行っている。病態に応じて各専門科と連携して治療を行い、また重篤な状態の患者における血液浄化療法は麻酔科の御協力のもとICUにて施行している。

当院で新規に維持透析を導入した患者は、患者の希望に沿って近隣の維持透析施設へ紹介している。また、他院で維持透析中に当科に紹介された患者は、検査・治療が終わり次第、紹介元に逆紹介することを原則としているが、昨今、入院継続・リハビリの必要度に応じて自宅退院ができず他の入院透析施設へ転院となるケースも多い。腹膜透析は腎臓内科病棟で導入し、腹膜透析外来(内科外来診察室)で定期フォローしている。

令和5年度、新型コロナウイルス感染症(COVID-19)は5月8日で5類感染症に引き下げられたため、府や保健所からの要請によるCOVID-19透析患者の受入れは終了したが、個別に医療機関からの入院要請には引き続き対応している。

令和5年度の当人工透析部における血液浄化施行件数はのべ1,308回/年（内訳：血液透析1,223回、血漿交換/血漿吸着60回、他25回）で、前年度に比べ+23回増加した。また、患者入室なしで行うCARTは別途25回実施した。上記の1,308回というのは、毎日1クルの運用で平均して平日の月水金コース6人、火木土コース2人平均で行う回数であり、土曜・祝日・大型連休・年末年始のメディカルスタッフ配置数から考えるとこれ以上伸びる余地は小さくなってきている。血液透析の新規導入は53人/年で、前年度から+13人増加した。また、腹膜透析の新規開始は4名あった（前年度は0）。なお、令和5年度COVID-19の透析患者数は5人(COVID-19血液透析回数は19回)で、前年度から大幅に減少した（5類に引き下げ後の数も含む）。

<今後の課題>

ここ数十年全国での透析患者数は増加の一途をたどっていたが、日本透析医学会の全国調査による令和4年12月末の時点で347,474人と初めて減少に転じた（COVID-19関連死の増加による一時的な減少という説もある）。また導入年齢の高齢化が進んでいる。全国的な慢性腎臓病対策の効果で、透析導入時期が引き延ばされているのであろうという解釈もされているが、動脈硬化性腎硬化症の増加というように高齢化によって生じている腎障害の割合も増えているものと思われる。

この病院のある豊中市は全国に比べ高齢者の割合が低く、今後、全国から遅れて高齢化が進んでくると思われる。65歳以上の高齢者の比率は、全国では令和4年9月の時点で29.1%（総務省統計局ホームページより）に対し、豊中市は令和5年4月時点で25.9%（豊中市ホームページ年齢別人口より計算）と低い。今後も周辺地域での透析の需要は増加していくと推測される中で当院の役割は依然大きいと思われる。また、また当院は総合病院ゆえ他の様々な併存症・合併症を抱えた血液透析患者を治療を行う責務もあり、引き続き自己研鑽も重ねつつ質の高い透析医療を提供できるよう努めるべきと考えている。

また、医師以外のメディカルスタッフにおいても専門性を高めていくことが診療の質を上げて患者の満足度向上につながるものと思われる。

(※ 学術活動、業績、などについては、看護部、臨床工学部、腎臓内科などの項目を参照)

7. 内視鏡部

<現 況>

内視鏡部は、消化器および呼吸器系の内視鏡検査を専門とし、高度な医療技術を提供している。消化器内視鏡分野では、16名の消化器内科医と8名の消化器外科医のスタッフ（うち4名が指導医）が、日本消化器内視鏡学会の認定施設として、先端的治療に従事している。呼吸器内視鏡では、指導医1名と専門医3名が専門的な検査を実施している。

本部門の特徴は、次のとおりである。

- ・急性期対応：消化管出血や重症胆道感染症への緊急内視鏡
- ・がん診療の先進性：内視鏡的粘膜下層剥離術（ESD）による早期癌の治療や進行癌へのステント留置
- ・多様な内視鏡技術：ERCP、超音波内視鏡検査、カプセル内視鏡、ダブルバルーン内視鏡などの高度技術を駆使した診療

令和5年度は前年度に比べて内視鏡検査数が微増し、回復傾向にある。詳細は以下の表を参照。

令和5年度（2023年度）内視鏡部症例数（総検査件数8,687例）

検査件数	
上部消化管内視鏡総数	4,688
（うち経鼻内視鏡）	578
（うちミニチュアEUS併用）	33
下部消化管内視鏡検査総数	3,265
（うちミニチュアEUS併用）	14
ダブルバルーン小腸内視鏡検査	12
カプセル小腸内視鏡検査	2
胆膵内視鏡（ERCP）総数	619
（うちDB-ERCP）	38
超音波内視鏡(EUS)	252
（うちEUS-FNA）	73
気管支鏡	149
治療	
食道ESD	18
胃ESD	137
大腸ESD	43
食道ステント留置術	9
胃・十二指腸ステント留置術	15
上部ポリペクトミー/内視鏡的粘膜切除術(EMR)	29
上部消化管出血止血術	109
異物除去	14
チューブ留置術（イレウスチューブ・EDチューブ）	36
内視鏡的胃瘻造設術	5
食道狭窄拡張術	14
胃・十二指腸狭窄拡張術	2
食道静脈瘤硬化療法、結紮術（EIS/EVL）	45/27
大腸ポリープ内視鏡的粘膜切除術(CSP含む)	1,661
（うちCSPのみ）	1,095
大腸ステント留置術	18

結腸狭窄拡張術	2
S状結腸捻転整復術	28
乳頭括約筋切開術(EST)	176
胆道金属ステント留置術	32
ENBD/ERBT	47/311
結石除去術	213
膵管ステント留置術	51
EUSガイド下嚢胞ドレナージ術	2
合計	3,044

保有内視鏡機器

上部消化管内視鏡			
GIF-H290	4本	GIF-H290T	1本
GIF-Q260	1本	GIF-Q260J	1本
GIF-XZ1200	1本	GIF-2T Q260M	1本
GIF-H290Z	1本	GIF-2T240	1本
GIF-HQ290	1本	EG-840N	2本
GIF-H260Z	2本	EG-L580NW7	2本
GIF-1200N	3本	EG-L600ZW7	1本
GIF-XP290N	2本		
下部消化管内視鏡			
CF-H290I	4本	CF-H260AZI	1本
CF-H260AI	2本	PCF-Q260JI	1本
CF-Q260AI	1本	EC-760ZP-V/M	2本
PCF-H290ZI	5本	EC-L600ZP7	2本
CF-HQ290ZI	1本	EC-L600XP7/L	1本
十二指腸内視鏡			
ED-580T	2本	JF-260V	2本
TJF-Q290V	1本	JF-240	1本
TJF-260V	1本		
小腸内視鏡			
EN-580T	1本	EI-580BT	1本
超音波内視鏡			
EG-740UT	1本	UM-3R	2本
GF-UE260	1本	UM-G20-29R	2本
GF-UCT260	1本	UM-S20-17S	1本
気管支鏡			
BF-P290	2本	BF-XP290	1本
BF-Q290	1本	BF-240	1本
内視鏡処理装置・光源装置			
CV-1500	2台	VP-7000	2台
CV-290	5台	LL-7000	2台
CLV-290	1台	BL-7000	2台
CLV-290SL	2台		
内視鏡用超音波観測装置			
SU-1	1台	EU-ME2 Premier	2台

診療部門の現況と研究研修事項

Ⅱ 中央診療局の現況と研究研修事項

内視鏡高周波装置			
VIO3	1台	ESG-100	3台
VIO300D	1台	ICC200	1台
内視鏡洗浄器			
ESR-200	4台		
炭酸ガス送気装置、送水ポンプ			
UCR	5台	JW-2	2台
OFP-2	5台	JW-3	1台
GW-100	2台	PB-30	1台
透視システム			
ハイビジョン透視録画装置VC1000システム	1式	透視装置EXAVISTA日立	2台
内視鏡情報管理システム			
富士フイルムメディカル NeXUS	1式		
動画録画機			
TEAC UR-4MD	1台		

<今後の課題>

消化器センターの開設に伴い、新型コロナウイルス感染症の流行以前の検査件数に近づいている。ただし、特殊内視鏡検査の増加や高齢者の増加により、検査件数の増加が頭打ちになりつつある。今後の課題として、安全性を保ちつつ検査数を増やすためには、内視鏡室の拡張や環境整備が必須である。

また、内視鏡室の透視システムの更新が令和6年度に予定されている。この高額な医療機器の更新に際しては、耐用年数や補償期間を考慮した計画的な進行為求められる。

8. 臨床工学部

<現 況>

臨床工学部は、臨床工学技士5名、SPDスタッフ2名で業務を行っている。業務内容は大きく分けて臨床業務と機器管理業務を行っている。各種認定については、今年度に1名が透析技術認定士を取得し、ME臨床専門認定士1名、呼吸療法認定士2名、透析技術認定士2名、心血管インターベンション技師1名となっている。

臨床業務として、心臓カテーテル業務、ペースメーカ関連業務、補助循環装置操作業務、人工透析を含む血液浄化業務、末梢血幹細胞採取業務、ラジオ波焼灼術業務、手術室業務を行っている。

心臓カテーテル業務、ペースメーカ関連業務、補助循環装置操作業務は循環器内科、心臓血管外科と連携し業務を施行している。ペースメーカ関連業務に関しては循環器内科医師と共に行っている。また、緊急時や手術、各種処置、MRI対応機種植込み患者のMRI撮影時に設定変更を施行している。

人工透析を含む血液浄化業務は、月曜日から土曜日まで毎日実施している。人工透析室での維持血液透析、血液透析濾過、各種血液浄化療法、腹水濾過濃縮再静注法の施行を腎臓内科をはじめ関係部署と連携し施行している。ICUでの人工透析をはじめとする各種血液浄化を麻酔科と連携し施行している。緊急時にも安全・安楽・速やかな業務遂行を目標に各科と連携し業務を施行している。

機器管理業務は臨床工学技士とSPDスタッフが協力し、中央管理機器の貸出返却業務および清掃、臨床工学部管理機器である人工呼吸器、輸液ポンプ、シリンジポンプを始めとする約20機種900台の点検・保守管理を施行している。臨床工学部管理以外の医療機器故障時の一次対応等も行っている。また、院内の修理伝票の一元管理のため修理伝票の集配業務も行っている。

手術室業務は麻酔器をはじめとする機器の始業前点検の実施、機器使用時のサポート、各種点検業務を行い安全に手術を行えるよう業務を行っている。令和5年度は平均802.5件/月の医療機器準備、始業前点検を実施し、平均139件/月の手術に対する技術支援を実施した。機器トラブルは平均7件/月で発生した。重篤な事例として3件発生したがいずれも代替器の使用等で手術を完遂する事ができた。

以上の業務についてはOn Call体制をとり夜間、休日も24時間対応し各科診療補助、機器の安全管理、使用に努めている。今年度呼出件数は136件であり、前年度呼出件数は223件であり、前年度に比べ87件減少した。これは、血管撮影室の更新工事のために心臓カテーテル検査が停止していたためであると考えらる。

業務拡大に向けた厚生労働省講習の受講が全員修了した。今後タスクシェア・シフトに向けた業務拡大の準備をすすめていく。

<今後の課題>

タスクシェア・シフトに向けた動きや血管撮影室1のアンギオ装置の更新もありOn call呼出件数増加が予測される。業務に対して現在の人員では院内からの業務要望に応じる事が不可能になってきている。現在の人員で可能な限り協力し他部署と連携して業務効率化をめざす。また、増員された時点で順次業務拡大を実施し安全性を高め、関連部署と連携し効率的な運営を実施していく。

医師、看護師の業務改善に向け臨床工学部として業務効率化に寄与する医療機器、システム提案を実施し、実際に使用する部署と協議を行いより安全性、効率性の高い機器使用を実施していくことが必要であると考えらる。このために様々な情報を積極的に入手し、関連部署に情報発信を行い情報共有を行っていく。

9. 栄養管理部

<現 況>

栄養管理部では入院患者の食事については、年22回実施の様々な行事食に加え、委託業者エームサービス(株)の協力を得て通常のメニューとは異なる四季折々の材料を使用した「シェフのおすすめメニュー」及び家庭でも比較的作りやすい野菜たっぷりの「マチカネデリカ」をレシピ付きカードと共にそれぞれ月に1回提供し、好評を得ている。また各チーム医療に参画しており、栄養サポートチーム、嚥下訓練チーム、褥瘡対策委員会、緩和ケア委員会、糖尿病センター、心臓病センター、心臓リハビリテーションにおいてカンファレンス・ラウンドに積極的に参加している。講演会や勉強会講師、学会発表も積極的に取り組んでいる。

患者食給食業務については、病院移設当初から調乳業務を、その後食器洗浄業務、平成22年度からは調理業務全般と徐々に委託業務を拡大してきた。令和3年度は、これまで病院で購入していた給食材料についても委託化への準備を進め、令和4年度からはほぼ全ての給食業務を委託へ移行した。今後は疾患や患者の状態に合わせたおいしく安全な食事提供は委託業者が担い、病院管理栄養士はこれまで以上に患者の栄養管理に重点を置けるよう体制強化を図っていく。患者さんの“治る力”を支えるために、病院栄養士、委託業者が問題を共有し、それぞれの専門性を発揮しより良い栄養管理をめざす。

《会議》

豊中市病院連絡協議会栄養士部会

※新型コロナウイルス感染症の5類移行で一部研修会再開。令和5年度は集合型2回、Web情報交換会2回、アンケート1回実施。

大阪府公立病院栄養士代表者会 (定例研究会5回／年、役員会6回／年)

《学外実習生受入れ状況》

- ・武庫川女子大学
- ・大阪樟蔭女子大学
- ・大手前大学
- ・大阪青山大学

<今後の課題>

令和4年度に続き、令和6年度診療報酬改定においても管理栄養士業務に関して多くの項目で拡大・拡充を図る改定がなされた。業務ニーズが高まるとともにより高度な専門性が求められており、それに叶う管理栄養士の育成と、入院患者の栄養管理業務拡充に向けた人員体制の整備が課題である。現状では限られたマンパワーの中、栄養介入が必要な患者により多く関わられるよう各チーム医療に積極的に参画し、栄養面から病状の改善を促し在院日数の適正化に貢献していく。

また、給食業務全面委託後も患者満足度が維持できるよう、現受託事業者と共同し患者食の内容及びサービスの適正化を図っていく。給食業務については、労働人口が減少していく中でこれまで以上に人員確保が難しくなる可能性が高く、現在のクックサーブ方式での給食提供がどこまで継続できるかは不透明な状況である。今後も安定して患者給食が提供できる方法を模索していく必要がある。

<研究研修事項>

学術・研修活動(市立豊中病院主催・共催・その他)

◎市立豊中病院主催・共催

■第9回Toyonaka AYAトーク ◎

「毎日のごはんはどう選ぶ? どう食べる?」

井上文子

豊中市、市立豊中病院

参加者: 2名

令和5年10月17日

■市立豊中病院 がん医療市民公開講座 ◎

がん治療において心と体を支えることの重要性について ～栄養と食事のはなしを中心に～

今村博司、井上文子

豊中市、千里ライフサイエンスセンター 参加者：106名 令和5年11月18日

■第61回日本癌治療学会学術集会イブニングセミナー

タスクシフト／シェアが求められる時代の消化器がんチーム医療

「がん治療期における管理栄養士のかかわり」

井上文子

神奈川県 横浜市、パシフィコ横浜 参加者：82名 令和5年10月20日

学会発表

■多職種による治療支援により血糖改善，減量を維持し得た当院第一例目の肥満外科手術例についての検討

井上文子、岡内幸義、下須賀香奈子、柳本喜智、岩橋博見

第66回日本糖尿病学会年次学術集会

鹿児島県 鹿児島市、かごしま県民交流センター他 令和5年5月11日－13日

研究会・集談会発表

■実習生の受け入れ状況について

井上文子

大阪府公立病院栄養士代表者会令和5年度第5回定例研究会（事例研究発表会）

大阪市、大阪府栄養士会事務局 令和6年3月12日

講習・講演

■がん患者さんの心と体を支える栄養と食事のはなし

井上文子

箕面モデル

箕面市、Web開催 令和5年6月22日

寄稿文・テレビ・ラジオ・その他

■がん診療における薬剤師、栄養士の関わり

今村博司、久田真規子、井上文子

FOCUS Next

アステラス製薬 令和6年1月17日